

本報告書の要約

第1章 中学生の学習に関する意識・実態

第1節 中学生の学習行動

1. 学校での学習の様子

① 好きな教科・嫌いな教科

中学生の一番好きな教科は「体育」であり、全体の67.0%が肯定的な回答をしている。これに「美術」が続ぎ、約半数が「とても好き」もしくは「まあ好き」と回答している。極端に嫌いな教科もない代わりに、圧倒的多数の支持を得ている教科もない。今年度初の導入となった「総合的な学習の時間」は、38.5%が好んでいるにとどまっている。教科の好き嫌いには男女で大きな違いがあり、男子は「理科」「数学」「体育」を好み、女子は「音楽」「美術」「国語」を好む傾向がある。第2回調査で率を伸ばした「理科」「数学」であるが、今回は6ポイントの減少となった。「とても嫌い」「まあ嫌い」と答えた中学生の割合は、「社会」で8ポイント以上の増加を示した(表1-1-1、図1-1-1)。

② 授業の理解度

「ほとんどわかっている」「70%くらいわかっている」という回答が比較的多い。なかでも5教科の授業の理解度は、「数学」と「国語」で高めの自己評価となっている。時系列でいうと、一貫して低下している教科はなく、「国語」「社会」「数学」では第2回調査よりも上昇しているほどである。性別による違いは、教科の好き嫌いの違いを反映している(表1-1-2)。

③ がんばって勉強したい教科

一番がんばって勉強したいのは「英語」(58.7%)で、次いで「数学」(55.1%)である。これらに「社会」(44.5%)を加えた3つの教科だけが3割を超えていた。「総合的な学習の時間」は「技術・家庭」と同様、「がんばって勉強する教科」ではないようである。ここでも男女差が大きく、女子は「音楽」「数学」「英語」を、男子は「国語」「理科」「体育」をそれぞれあげる傾向が強い。「体育」をがんばって勉強したいという中学生が大幅に増え、「音楽」「美術」も伸びている(表1-1-3)。

④ 授業の受け方

板書をきちんとノートに書きつけることは広く習慣化されている。「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」は94.7%が「よくある」もしくは「時々ある」と回答している。「授業の内容が難しいと思う」中学生は、「授業の内容が簡単すぎると思う」者たちの3倍以上の割合を占める。また、授業の受け方がより積極的になったという第2回調査の特徴を引き継いでいる。授業の進度や難易度に違和感を覚える女子は依然として多い(表1-1-4、図1-1-2)。

⑤ 好きな学校の勉強方法

新しい授業スタイルがかなりの程度普及してきている。中学生に好まれるのは、「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」「とても好き」と「好き」の合計:75.0%、「友だちと話し合いながら進めていく授業」(74.4%)、「パソコンを使ってする勉強」(74.3%)である。とはいえ、多くの中学生には「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」といった方法

はあまり好まれず、主体的にじっくりと調べ内容を発信していく勉強方法は避ける傾向にある(図1-1-3)。

2. 家での学習の様子

① 家庭学習の頻度

中学生がふだん家で勉強する頻度のばらつきは大きい。その中でもっとも多いのは、「週に半分以下しかしない(2～3日)」で全体の4分の1となっている。「家ではほとんど勉強しない」もほぼ同率である。「週に半分以上はする(4～5日)」と「週に半分以下しかしない(2～3日)」の割合がやや小さくなり、逆に「家ではほとんど勉強しない」が第2回調査と比べて6.4ポイント増加している。ただし、「ほとんど毎日する(週に6～7日)」の占める割合に大きな変化はみられない(表1-1-5)。

② 家での学習時間

「平日(月曜日～金曜日)」の学習時間でもっとも多いのは「1時間」で全体の2割を占める。とはいえ、ここでも個人間のばらつきが大きい。「ほとんどしない」と「およそ30分」という短い学習時間の層が第1回調査では18.8%にすぎなかったが、第2回調査では微増し、第3回調査では30.7%に達した。日曜日についても同様に「ほとんどしない」層が第2回調査と比べて10ポイントも増加した。テレビの視聴時間は、1日に「2時間以上」見ている中学生が83.1%に及んでいる。「3時間30分」よりも長い視聴時間の中学生は、第1回調査から13.4ポイントも増加している(図1-1-4、5、6)。

③ テスト勉強の開始時期

「1週間くらい前から」定期考査の勉強を始める中学生がもっとも多く、全体の3分の1を数える。「1週間くらい」以前に準備を始めるケースが4分の3に及んでいる。女子のほうが、定期考査の勉強を比較的早くから始める傾向がある。少なくとも定期考査の勉強の開始時期が第1回調査・第2回調査よりも遅くなっているという事実は見つからない。(表1-1-6)。

④ 家での勉強内容

家での勉強の中心は、「学校の宿題」で全体の84.5%が実施している。依然として「学校の宿題」が中心であることには変わりがない。ほとんどの項目で、女子の実施率が男子を上回っている。「宅配の家庭学習教材」が大きく減った以外に、「学校の授業の予習」「学校の宿題」「学校の授業の復習」が5ポイント程度の減少を記録している。学校の授業にかかわる勉強が次第に後退しつつあるようである(表1-1-7)。

⑤ 家での学習の様子

「出された宿題をきちんとやっていく」「あてはまる」+「まああてはまる」は91.3%と高率である。宿題をこなす習慣はかなり一般化しているようである。第2回調査で増えた「学習の習慣化」にかかわる項目では高い数値が維持されている。「ながら勉強」は第2回調査よりもさらに多くの中学生に広がっており、「ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する」に「あてはまる」と回答した割合が第2回調査よりも7.1ポイントの増加となった(表1-1-8、図1-1-7)。

⑥ 日常生活の中での「学習」

中学生にとってもっとも日常的な学習活動は「読みたい本を本屋で探して買う」で、69.4%が「よくする」もしくは「時々する」と回答した。「美術館や博物館に行く」(13.2%)や「日記をつける」(19.4%)はあまりなされていない。女子は男子に比べて、「日記をつける」「ペットや動物・植物の世話をする」という学習活動を行うケースが多い(表1-1-9)。

⑦ 家庭環境

「自分一人の勉強部屋を持っている」中学生がおよそ3分の2に達する。この割合は、第2回調査よりも若干増えたが、この10余年を通してみるとさほど変化はみられない。「親とよく話をする」中学生も66.6%と比較的高い。さらに、成績に対する母親の関心(認知度)は高く、84.1%が「お母さんは私の成績をよく知っている」と回答している。その一方で、具体的に「勉強をみる」などのかわり方は比較的少ない(表1-1-10)。

3. 学校外の学習機会

① 学習塾・予備校の利用

学習塾や予備校への通塾率は43.5%を数えている。通塾者の9割以上は、週に「1日～3日」の塾通いをしている。通塾率は、第2回調査より4ポイント低下した。「4日以上」通塾する割合も第1回調査から4.6ポイントの漸減傾向を示している。通っている塾は「補習塾」が全体の3分の2を占め、「1クラスに1人」の個別指導塾に通う中学生は14.7%であり、少人数指導が一定程度普及している(図1-1-8、9、10、11)。

② 諸学習機会の利用

「『進研ゼミ』のような通信教育」がもっとも高い利用率を示し、全体の24.8%に利用されている。これに、「塾や予備校の夏期講習(今年の夏休み)」「(22.1%)」が続いている。「学校が行う夏期補習授業(今年の夏休み)」は第1回調査の4分の1にまで減少した。全体に学校が「補習指導」から手を引く傾向が強まっている(表1-1-11)。

4. 学習の方法

① 学習の方法

学習の方法としては、反復練習がもっとも一般的な方法となっている。「英単語をくり返し書いて覚える」「プリントや問題集で数学の問題練習をする」「漢字をくり返し書いて覚える」はいずれも4分の3の中学生にとっておなじみの学習方法である。逆に、「図鑑や事典で調べる」「よくする」「時々する」という中学生は12.8%ときわめて少ない。「辞書を引く」は第1回調査から約20ポイントもの大幅低下を記録している。教科書をベースにした学習方法が少しずつ重視されてきている(図1-1-12、13)。

② 学習方法のタイプ

12組の一対の学習方法からいずれかを選んでもらったところ、問題集を中心にした復習が多くの中学生の一般的な学習方法であることが浮き彫りになった。「復習中心」「問題集中心」「書いて覚える」「試験の前にまとめて勉強する」「自分で整理しながら勉強する」「書きながら覚える」といった方法が好まれる。「できるだけ考えようとする」「わからないところは、自分で考える」というスタイルが回を追うごとにはやらなくなっている。新学力観の目指す方向とは対照的に、学習はますます機械的なものになっている(図1-1-14)。

③ メディアの利用

利用率がもっとも高いのは、「学校でパソコンを使う」の55.6%('よくある'と'時々ある'の合計)であり、これにわずかの差で「家でパソコンを使う」が続く。半数を超える中学生が学校でも家庭でもパソコンを利用していることになる。インターネットの利用も盛んであり、31.8%もの中学生が「家でインターネットを使って何か調べる」ことを経験している。特に家庭でのパソコン利用率はわずか5年で倍増しており(27.4%→54.7%)、家庭による情報リテラシー格差が生まれてくる可能性も考えられる(表1-1-12)。

第2節 中学生の学習観・成績観

1. 成績観

① 成績の自己評価

成績の自己評価は、真ん中を中心に左右対称のヤマ型の分布をしている。数学や英語に比べて、国語の散らばりが比較的少なく中央に集中する傾向がある。英語と数学の分布は全体に「できない」という方向にいくらか偏っており、国語に比べてマイナスの自己評価がすでにでき上がっている可能性が高い。なお、教科ごとの男女差も大きい(表1-2-1、2)。

② とりたいと思う成績

中学生が「とれたらいいと思う成績」は、一方にかなり偏った分布となっている。自己評価の場合とは違って、7段階中の「1(上のほう)」と「2」に6割以上の中学生が集中している。この10余年で「とれたらいい成績水準」が低下しているという事実はなく、むしろわずかながら上昇しているほどである(図1-2-1)。

③ がんばればとれると思う成績

「現在の成績は別としてがんばればとれると思う成績」を尋ねたところ、やはりきわめて高水準にある。54.7%が上位の「1」~「2」に回答し、「1」~「3」に78.6%が集中している。「がんばればとれる」という楽観的な見方は、中学生の間にかかなり浸透している。しかも、「1」~「3」の割合は、第1回調査から第3回調査まで減少するどころかわずかながら増加させている(図1-2-2)。

④ 成績観・学力観

「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(62.8%)という意識が依然として中学生の成績観のベースにある。その一方で、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(57.8%)という意識も根強い。「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」(16.7%)という回答も少ないし、「今は勉強することが一番大切なことだ」(24.5%)という意識も薄い。二面的な意識を持ちながらも、独特のバランス感覚を持って先の見えない未来社会に対処しようとしているかのようである(表1-2-3)。

⑤ よい成績に大切だと思うこと

よい成績をとるのに大切な条件のトップ・スリーは、「授業をしっかりと聞く」「努力」「上手な勉強法」である。授業を中心にして上手な勉強法を身につけながら努力することがよい成績の鍵を握っていると考えている。「よい学習塾や予備校に行く」「家族の協力」「生まれつきの能力」は「よい成績」には結びつきにくいととらえられている。以前よりも「運」や「よい学習塾や予備校に行く」といった条件を大切だと認識するようになっている(表1-2-4)。

2. 学習していて感じること

数学や社会を自ら工夫して考え学ぶという中学生は比較的少ない。専門家の感じ方・考え方が中学生に十分には理解されていない。男女の違いが大きく、学ぶことの動機づけが異なっている。女子の場合、コミュニケーションや人間関係への関心が高いようである(図1-2-3)。

3. 学習上の悩み

「どうしても好きになれない科目がある」がもっとも多くの中学生の悩みとなっており(73.2%)。さらに、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.8%)という状況にある。悩みはほとんどの項目で女子に多い。「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という意識は一貫

して強まっており、第1回調査よりも10.6ポイントの増加となっている。学習へのインセンティブがますます得られにくいようである(表1-2-5、図1-2-4)。

4. 進路・進学意識

① 高校への進学

高校進学希望率は94.6%に達している。このうち普通科を希望する中学生が7割に達するが、普通科志向が強い中で専門学科希望も2割を超えている。「推薦入試」志向が第2回調査より強まっている。進学したい高校のタイプの筆頭は、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(62.3%)である。また、「自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校」(58.9%)も人気の高校像である。「それほど努力しなくても入学できる高校」や「体験的な学習などのカリキュラムに特色のある高校」は2割程度にとどまっており、「進学状況のよい高校」へのこだわりもかなり弱い(図1-2-5、6、7、8)。

② 希望する進学段階

希望する進学段階のうちもっとも希望が多いのは、「四年制大学まで」で31.7%に上っている。以下、「高校まで」(26.8%)、「専門学校・各種学校まで」(19.7%)、「短期大学まで」(14.4%)となっている。女子のほうが、現在の進学状況と同様に二年制の中等後教育機関を希望する割合が大きい。この10余年の変化としては、「専門学校・各種学校まで」「高校まで」の希望者が増加傾向にある点が注目される(表1-2-6)。

第2章 中学生の学習到達度

第1節 数学

1. 出題のねらい

今回は主として、①数学的な見方や考え方、②数学的な表現・処理、③数量、図形などについての知識・理解をみる問題を作成した。

2. 通過率・得点分布

「数と式」の領域では、問題ごとの通過率にばらつきが大きい。なかでも、文字式の通過率が低かった。「図形」の領域は通過率40～50%台程度、「数量関係」は50%前後が多く、通過率はほぼ一定していた。得点分布をみると、数学はなだらかな2つの山を描く双峰型であり、学力のばらつきが感じられる(表2-1-1、図2-1-1)。

3. 調査結果解説

「数と式」……正負の計算、文字式の計算は通過率7割を超え、「空欄」も少なかった。しかし、方程式の計算では分数が出ると極端に通過率が下がり、分数計算に弱い生徒の実態が浮き彫りになった。また、計算は操作的にできても、式の意味を考えたり、きまりを式に表したりといった問題は、通過率が低かった。

「図形」……点対称な図形の作図、三角柱の表面積の求積など、小学校の範囲に含まれる問題の通過率が低く、学習内容が定着していない様子がうかがえた。また、基本的な作図の方法も十分に定着しているとはいえない。

「数量関係」……比例、反比例の表、式、グラフの作成では、ほとんどの問題が通過率50%前後で、十分に定着しているとはいえない状況であった。

4. コメント

形式的に処理できる問題の通過率が高いが、式を読んだり式に表したりする力が育っていない。また、選択肢を1つずつチェックすればできる問題や前後の設問に関連づければ解ける問題でも通過率が低い。問題解決に必要な情報を十分に活用できておらず、問題解決力が不足しているというより、その姿勢が固いように思われる(杉山吉茂)。

全体の得点分布は2つに分かれた形をしており、選択「数学」などで生徒のニーズに合った指導をする必要がある。本文では、通過率を目安として分析を行った(伊藤説朗)。

第2節 国語

1. 出題のねらい

今回は、①国語への関心・意欲・態度、②表現の能力、③理解の能力、④言語についての知識・理解・技能の4観点をおさえるが、①については「学習に関する意識・実態調査(アンケート調査)」で把握できるようにした。

2. 通過率・得点分布

「音声言語」および「説明的文章」では、通過率がほぼ一定(90%台および60%台)であったが、「文学的文章」や「言語事項」は通過率にばらつきがあった。また、数学と国語の相関をみると、両者には一定の関連があるものの小学生などに比べると相関性は弱かった(表2-2-1、図2-2-1、2)。

3. 調査結果解説

「音声言語」……聞き取りの問題(①(1)~(3))ではいずれも通過率が9割を超えている。聞き取った内容をもとに自分の意見を整理して表現する問題(①(4))では「空欄」が少なく、全体的に意欲はあるが、理由や根拠の述べ方が弱いと感じられた。

「説明的文章」……筆者のものの見方・考え方を理解して「空欄」に記入する問題(②(4))では7割弱の通過率であったが、前後の文章につながる形で表現されていなかった。また、何について答えるかわかっていても整理できていないなど、表現力が十分でないと感じる問題(②(2))もあった。

「文学的文章」……登場人物の心情を読み取り記述させる問題(③(6))は30.8%と低い通過率であった。的外れな解答や「空欄」は少なかったが、設問の条件を満たす形で解答できていないケースが多かった。

「言語事項」……似たような意味の熟語を正しく理解しているかをみる問題(④(2))の通過率が極端に低かった。また、ことわざの意味の問題(④(3))では、設問により通過率にばらつきがあり、日ごろの生活で使用する機会があるかどうかによって通過率が変わっているように感じる。

4. コメント

調査結果の検討・活用の際には、内容領域全体としての把握と同時に、設問の内容に即して学習状況にどのような傾向が認められるか、どのような問題が提出されているか、検討を加えることが求められる。本文では領域ごとに検討を行った（尾木和英）。

全体的な傾向では、音声言語は他と比較するとかなり高く、また、説明的文章や文学的文章、言語事項も設問によるばらつきがあるものの、まずまずの結果を示している。本文では領域ごとの調査結果をもとに指導のポイントについて考察を行った（大熊 徹）。

第3章 学習に関する意識・実態と学習到達度の関連

第1節 中学生の学習行動と学力

1. 学校での学習の様子と学力

① 好きな教科・嫌いな教科と学力

数学の学力階層が上位の生徒ほど数学を「好き」「とても好き」「まあ好き」と回答する割合が大きい。同じように、数学の学力階層は「理科」や「美術」の好き嫌いとも強く関連している。国語でも学力階層と好き嫌いとの関連がみられるが、数学の場合ほど強くはない。むしろ「社会」や「理科」と強く関連している。全般に、「体育」など一部の教科を除いて、学力階層の上位の生徒ほど各教科を「好き」と回答する割合が大きい。ただし、「総合的な学習の時間」の好き嫌いは、学力階層とは無関係のようである（図3-1-1）。

② 授業の理解度と学力

学力階層の上位の生徒ほど、授業の理解度も高いと自己評価している。たとえば、数学の学力階層が下位の生徒が「ほとんどわかっている」「70%くらいわかっている」と回答した割合は、上位層の4分の1以下にとどまる。中学生は、学力をかなり正確に反映した形で授業理解度の自己評価をしていると言ってよい（図3-1-2）。

③ がんばって勉強したい教科と学力

がんばって勉強したい教科は、2教科の学力階層とそれほど強くは結びついていない。数学の学力上位層ほど、「理科」を「がんばって勉強したい教科」にあげる割合が大きいですが、逆に「数学」は学力階層と逆の相関を示す。これは、教科の特質を反映した結果であると考えられる。なお、「体育」はいずれの教科についても、学力階層が下位層ほど「がんばりたい」と思う教科である（図3-1-3）。

④ 授業の受け方と学力

学力階層が上位の生徒ほど、板書以外の大切な話をノートに書いたり、不注意で間違えたことについてくやしき思い、間違えたテスト問題をやり直す傾向が強くみられる。学力階層が下位になるほど、授業を難しいと感じ、授業からの離脱行為（「いねむり」）をすることが多い。総じて、授業の受け方と学力は、相乗的に作用し合い、中学生の学習行動に影響を及ぼしているようである（図3-1-4）。

⑤ 好きな学校の勉強方法と学力

学力階層との間の一貫した関連は、部分的にしかみられない。数学・国語いずれについても、学力上位層ほどドリルなどの反復的な授業や調べ学習などが好きな者が多くなる。また、国語に限って言えば、「学校外のいろいろな場所に行ってする授業や調査」「先生が黒板を使いながら教

えてくれる授業」が好きなのは学力上位層である。また、「個人で何かを考えたり調べたりする授業」や「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」が好きな中学生はすべての層にわたっておしなべて少ない(表3-1-1)。

2. 家での学習の様子と学力

① 家庭学習の頻度と学力

平均をとれば、学力上位層ほど家庭学習の頻度も多いと言える。たとえば国語の場合、「週に1日くらいしかしない」と「家ではほとんど勉強しない」生徒の割合は、学力階層順に「31.2%→38.2%→42.9%→51.3%」と変化する。とはいえ、数学の学力上位層の31.4%が「家ではほとんど勉強しない」と回答しているように、学習の頻度と学力階層が必ずしも一貫した関連を示しているわけではない(図3-1-5)。

② 家での学習時間と学力

平日にせよ日曜日にせよ、家庭学習時間と学力階層はゆるやかに関連しているが、必ずしも直線的な関連があるというわけではない。特に、「3時間」「3時間30分」「それ以上」の占める割合に目立った違いはみられない。この点は、数学と国語いずれにもあてはまる。一方、テレビの視聴時間は学力階層と負の相関を持ち、テレビを長く見ている中学生のほうが学力が低くなる。関連の強さは、特に国語で顕著である(図3-1-6)。

③ テスト勉強の開始時期と学力

学力階層の上位層ほど、比較的早い時期からテスト勉強を開始する傾向がある。ただし、数学も国語も関連はそれほど強くない。学力下位層でもかなり早くからテストに向けた準備を始めるケースも少なくないようである(図3-1-7)。

④ 家での勉強内容と学力

数学・国語ともに関連がみられたのは、「学校の宿題」である。学力上位層ほど実施率が高くなっている。「塾や予備校の授業の予習・復習」「『進研ゼミ』のような通信教育」などの項目でも、上位層ほど実施率が高くなる傾向がある。これに対して、関連はそれほど強くはないが、「学校の授業の予習」は下位層で実施率が高くなっている(表3-1-2)。

⑤ 家での学習の様子と学力

「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」かどうかと学力階層との間には強い正の関連がある。「机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる」ことも学力上位層で比較的多い。学習に対する構えが学力階層に反映されるようである。逆に、「『勉強は学校だけですればいい』と思う」は、下位層で目立つ。さらに、数学に限って言えば、「ながら勉強」は、学力にマイナスに作用していると考えられる(表3-1-3)。

⑥ 日常生活の中での「学習」と学力

「文学作品や小説・物語を読む」「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」という学習をする者は、数学・国語いずれについても学力上位層に多い。「歴史小説や歴史の本を読む」「新聞のニュース欄を読む」は、国語の学力を増進させるように働く可能性がある。学校のみならず、家庭の学習の特徴が学力を高めていくようである(表3-1-4)。

⑦ 家庭環境と学力

「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」というようなかかわり方は、決して学力を高めないのである(因果関係は定かではないが)。「勉強をみる」ような直接的な学習支援だけでなく、「博物館や美術館に連れていく」という間接的な文化的環境が学力の高低に関連している可能性が高い。親の教育関心やコミュニケーションは中学生の学習を支える重要な資源

である（図3 - 1 - 8）。

3．学校外の学習機会と学力

① 学習塾・予備校の利用と学力

通塾率は、数学においてのみ関連し、学力上位層ほど通塾率が高く、56.8%に達する（通塾日数も数学でやや関連）。同じく数学の学力上位層ほど、「進学塾」の占める割合が大きい。通塾行動によって数学の学習が支えられているという現実がある。なお、受講者「4人以下」の少人数指導方式の塾には、学力下位層が通塾する傾向がある（表3 - 1 - 5）。

② 諸学習機会の利用と学力

「『進研ゼミ』のような通信教育」および「塾や予備校の夏期講習」を利用する者は、学力上位層に多くみられる。これに対して、「家庭教師」は、学力下位層で比較的多く利用されている（図3 - 1 - 9）。

4．学習の方法と学力

① 学習の方法と学力

家での学習の方法に関しては、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」「英単語をくり返し書いて覚える」「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」という方法が、学力上位層で好まれている。反復的な学習は、今回のテストで測定されるような学力を高める上で有効であると考えられる。単に暗記するよりも、くり返し練習し自分で内容を整理していくような能動的なスタイルがプラスに作用するようである（表3 - 1 - 6）。

② 学習方法のタイプと学力

数学と国語でほぼ同一の関連性がみられた。学力上位層では、「問題集」を中心にした「復習」が一般的で、「難しい問題をじっくり考える」タイプが多い。「苦手科目」を中心にして勉強し、「わからないところも自分で考える」ほうでもある。逆に、学力下位層では、「毎日こつこつ勉強」し、「わからないところは聞き」ながら、「参考書」「予習」中心の学習を進める。なお、数学と国語で若干の違いもみられる（図3 - 1 - 10）。

第2節 中学生の学習観・成績観と学力

1．成績観と学力

① 成績の自己評価と学力

成績の自己評価と学力階層の関連はきわめて強い。特に、数学の学力階層は、英語や国語の自己評価ともかなり強く関連している。国語の学力階層に関しては、数学の場合よりも関連は弱くなっている。数学と国語いずれについても中学生は自らの学力階層をかなり正確に認識しており、これらの意識は総合成績の自己評価とも結びついているようである（表3 - 2 - 1）。

② とりたいと思う成績と学力

とりたいと思う成績の水準は、実際の学力階層によってある程度枠づけられている。学力上位層では、「1（上のほう）」と「2」が合わせておよそ9割を占めるが、下位層では3割程度である（図3 - 2 - 1）。

③ がんばればとれると思う成績と学力

「がんばればとれると思う成績」もまた、学力階層と強い関連を示している。学力上位層では、「1（上のほう）」と「2」が合わせて8割台であるが、下位層では1～2割程度にとどまってい

る。この傾向は、数学と国語の別を問わず共通しているが、国語の場合にはいくらか関連は弱くなっている（図3-2-2）。

④ 成績観・学力観と学力

成績観・学力観は、学力階層によって大きく変わってくる。学力階層が下になるにつれて、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」などという回答が多くなり、ほどほどの進路でよしとする傾向が強い。逆に、「できるだけいい高校や大学」を志向する意識は学力上位層で顕著である（表3-2-2）。

⑤ よい成績に大切だと思うことと学力

よい成績をとるために大切な条件として、学力上位層で「運」をあげる者が多くなる傾向がみとれる。国語については、「人に負けたくないという気持ち」も学力階層と関連する。もっとも大切だと思うもの1つを答える単一回答では、総じて「努力」をあげる者が多い。また、学力下位層で「上手な勉強法」をあげる割合が小さくなる点が目を引く（表3-2-3）。

2. 学習していて感じることと学力

いずれの項目についても、学力上位層で該当する割合が大きい。学ぶことを通しての驚きや感動などを増幅させている。数学にかかわる項目を除くと、ほとんどの項目で国語の学力階層のほうが強く関連している点が注目される。一定の習熟によって知的好奇心が高まるのか、さまざまな心的な変化によって学習が促進されるのか、議論の分かれるところである（表3-2-4）。

3. 学習上の悩みと学力

学習をめぐる悩みは、学力が低いほど多くなり、多岐にわたってくる。数少ない例外として、学ぶことの意味・有用性にかかわる疑問があり、これは学力階層を問わず広がっている。また、「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」という後悔の念は学力下位層ほど強い。学力下位層にある中学生も勉強することから完全に降りているわけではないようである（図3-2-3）。

4. 進路・進学意識と学力

① 高校への進学と学力

高校進学希望率は、学力下位層を除けば95%前後である。「推薦入試」志向は、学力階層の中間2層で比較的強い。学力上位層ほど、「進学状況のよい高校」や「体験学習などのカリキュラム改革実践校」を好む。学力下位層は、「さほど努力を要せずに入学でき、校則も緩やかな高校」あるいは「好きな教科・科目を選択できる高校」に魅力を感じている（表3-2-5）。

② 希望する進学段階と学力

希望する進学段階と学力階層にはきわめて強い関連がある。学力上位層ほど「四年制大学まで」「大学院まで」を希望する者が多く、逆に「高校まで」は下位層ほど多い。とはいえ、数学の学力上位層の13.4%、国語の上位層の10.9%は「高校まで」という希望を持っており、この数値は「専門学校・各種学校まで」を加えると4分の1程度に達する（図3-2-4）。